

「白妖奇譚」

虚ろ^{うつろ}の神は
八百夜^{はっぴやくや}巡る



登場人物

- ・ 凜牙（リングア） 神座の主である『現人神』。白髪の若者。
- ・ 空木（ウツギ） 神座入りを許されている唯一の青年。凜牙の幼馴染。
- ・ 榊（サカキ） 空木の上司。神座の一切の権限を取り仕切るが、神座入りは許されていない。
- ・ 宮仕えの女 そろいの装束に身を包んだ女たち。凜牙の身の回りの世話をしている。

泣いている。

泣いている。

幼いこどもが手を伸べて。

なにかを、さがしもとめてる。

――なにがかなしいの。

いろいろなことをしてしまったの。

いろいろなことをしてしまったの。

自分があまりにも無知であったこと。

その、罪深さを。

目覚めて最初に目にしたのは天井。

いつもと変わらない木目を数えて、ここが虚ろの世界ではないことを確認する。

ずいぶんと長く眠りこんでいたらしい。

寝間にふりそそぐ光はあたたかく、外からはあわただしい足音が絶えず聞こえてくる。

その足音のひとつが、境戸（さかいど）の前で止まる。

「凜牙さま」

ひかえめに、宮仕えの女の声が呼びかける。

「凜牙さま、空木さまがおいでです。ご仕度が整いましたら、接の間へ」

眠気はまだとれていなかった。

女さえ現れなければ、もう一度寝なおそうと思っていた。

「ご仕度は整っていない」そう答えようとして、やめた。

虚ろのなかで聞いた幼子の泣き声が脳裏に響く。

――なにがかなしいの。

耳をふさいでも、静かな声が離れない。

二度寝して、再びあの虚ろに捕らわれるのはいやだった。

「……すぐに行く」

去っていく足音を聞きながら、顔にかかる髪をかきあげる。

混じりけのない、白い、腰までの長い髪。

虚ろに現れた女は、自分と同じ顔をしていた。

「珍しいな。おまえが昼過ぎまで眠っているとは」

身支度を整えて部屋を出ると、接の間に見知った青年の姿があった。

黒い髪に黒い眼差し。

邑（むら）にあってまだ若い、数少ない凜牙の幼馴染だ。

凜牙は「ああ」と生返事をかえし、空木の正面にあぐらをかいた。

同じ格好をした宮仕えの女たちが列をなして現れ、凜牙の前に次々と食事を据えていく。

相席者のもとにも運ばれそうになった食事は、空木が片手をあげて遠慮した。

いつもながら多すぎる食事の量に、凜牙は皮肉をこめ、彼女らに聞こえるように言った。

「女たちの足音がうるさかったんだ」

主の声には耳を貸さず、女たちは務めを果たして去っていく。

凜牙はその後姿を半眼になって見送り、

「おい。私はこんなに要らない。空木、おまえが食え」

手にしていた箸をさし出す。

「ちゃんと食っておけよ。今日は夜更けまで何も食えんぞ」

「私は食べたいときに食べ、眠りたいときに眠る」

「.....それを本気で言っているのなら、おれはお前を殴らねばならんが、どうする」

受け取った箸で芋の煮物をほおぼりながら、空木は努めて冷静に問いかける。

「殴る相手に向かって問いかけるやつがあるか」

凜牙は予備の箸を手に、魚の切れ端を食む。

もとより食は細い。

穀物はともかく、生き物を口にするのは苦手だ。

「暦巡りの日だぞ」

「わかっている。だが、それがどうした」

空木は肩をすくめ、立ちあがる。

「話にならん。おい、行くぞ。時間がない」

「あきらめろ、空木。いまさら練習を重ねたところで、あの爺どもはウンともスンとも言わない

」

「いいから来い」

腕をつかまれ、無理やり立たされる。

空木は境戸を開け、待機していた女たちに向かって手短かに告げる。

「こいつに、すぐに仕度を」

女たちは心得たもので、すぐに主を取り囲んで逃げられないようにした。

「凜牙さま、お支度を」

「準備はすべて整っております」

「さあ、こちらへ」

従順なようにみえて、この女たちがやり手であることは凜牙も空木も良く知っている。

そうでなければ、神座仕えには選ばれない。

「舞っている途中で倒れてやろうか」

女たちに連れられる間際、凜牙が腹いせにつぶやく。

幼馴染のそばを通り過ぎた後、すこし遅れて背後から声が聞こえた。

「その時は、おれが責任をもって後始末をつけてやる」

凜牙はその場に一度立ち止まったが、

「……戯言を」

振り返ることなく、女たちの背を追った。

「空木」

現人神の姿が屋敷の奥へ消え去った後、神座を出た空木に声がかかる。

眼前に佇む男の姿に、空木は慌てて頭を垂れた。

「榊様」

単色の衣に身を包んだ壮齢の男だった。

質素な身なりをしているが、空木の上に立つ者であり、神座の人事を統べる男でもある。

「当代様は健やかであったか」

「はい。本日も変わりなく」

榊と呼ばれた男は頷き、空木に顔を上げるように告げる。

「元老衆がおまえをお呼びだ。すぐに向かえ」

その言葉に、空木は眉根を寄せた。

「元老院が」

さきほど凜牙が『爺ども』と呼んでいた者たちのことだ。

呼び名の通り高齢の老人が多く、邑での発言権も強い。

この榊という男も元老衆のなかでは地位が低く、元老院での決定事項を覆すことはできない。

「何用ですか。おれは今から舞の仕度を――」

「おまえが行かなければ、舞ははじまらんぞ」

邑をあげての神事をおしてまで、老人たちが、空木を待っている。

邑の権力者集団の召集を蹴ることは反逆に等しい。

「わからないわけではあるまい。神座入りを許されている、唯一の供者であるおまえが」

榊のまなざしは鋭く、空木を見据えていた。

『曆巡りの日』とは、字の如く曆の巡る日のことを言う。

現在の巡りを振り返り、次の巡りを迎えるための儀式が行われる。

凜牙は当代の現人神として、巡りと巡りを取り結ぶ奉納の舞を行うことになっていた。

それは凜牙だけでなく、歴代の神座の主が司ってきた古代からの約束事なのだ。

舞台となる庭園は高い白壁で囲まれ、四隅には夜闇を払うよう篝火が据えられている。

壁際に数多の石が並び、庭の中央には石造りの円舞台。

舞のはじまりを告げるのは鈴の音だ。

壁向こうに待機した祭事衆が、元老院の指示で庭に旋律を届ける手はずだった。

鈴の音を待ちながら、凜牙はかたわらに佇む空木に話しかける。

「舞ははじまらない。おまえはやってこないで、ずいぶん退屈したぞ」

曆が巡るころの夜は寒く、凜牙の吐く息は白い。

通常陽の沈むころにはじめる舞は、今日に限って夜の帳が降りるまではじまらなかった。

相方として共に舞う空木も姿を見せず、凜牙は豪華な装束に身を包んだまま暇をもてあましていたのだ。

舞台の端にも小さな篝火が焚かれていたため、暖をとるには事欠かなかったのが幸いといえは幸いか。

「元老院の呼び出しがあった」

ぽつりともらした声に、凜牙の表情がこわばる。

「なにを言われた」

「『舞を成功させろ』、とだけ」

身を乗りだし、空木の襟首をつかむ。

髪飾りがしゃんと音をたてた。

凜牙が動くたびに、篝火の緋を映してきらめく。

「そんなわけがあるか！ あの爺ども、今度はおまえに何をさせる気だ」

「やめろ。着付けが崩れる」

空木は凜牙の手首をつかみ、その手を引き剥がした。

いつもの言いあいであればすぐに女たちが現れるところだが、今は違う。

神座と併設するように設けられた庭園は神園と呼ばれ、当代の現人神と供者しか立ち入ることを許されていない。

元老衆でさえ、この庭には踏み込むことができない。

いま凜牙と空木を見守るのは、歴代現人神の墓石だけだった。

神園とは、かつての神座の主たちに捧げられた庭なのだ。

「おれのことで、おまえが激昂することはない」

凜牙は空木を睨めつけた。

「うぬぼれるな。私は私のために怒っているんだ」

今朝視た虚ろの声が忘れられない。

いつもはすぐに消え去るはずの虚ろが、今日に限って延々と頭のなかに居座りつづけている。ものごころついたころから、この舞台上で空木と舞ってきた。

凜牙が主であり、空木は供者だった。

邑の誰よりも近くそばに仕え、過ごしてきた青年だ。

遅れて現れたその様子が、いつもと違うことに気づかない凜牙ではない。

「女たちも、榊も、空木も、そしてあの爺どもも。私には要求するばかりで、なにも教えようとしなない」

胸の内がざわめいている。

言いしれぬ不安に、声が震えた。

「凜牙。おれはおまえが大事だよ」

空木は静かに口を開く。

冷気をはらんだ風が、二人の肌を裂くように通りすぎていく。

「元老院や、榊様の命令がなかったとしても」

――しゃん

鈴の音が聞こえる。

続く謡にあわせて、空木とともに舞わねばならない。

「おれはおまえに会って、この身を捧げていただろう」

――しゃらん

今ならわかる。

あの幼子は自分だ。

尊い者とされながら、すべてを隠されてきた己なのだ。

謡はすでにはじまっている。

舞いはじめなければ、祭儀が完成しない。

「凜牙」

だが、凜牙は動くことができなかった。

「私は『できそこない』なんだ、空木」

氷のように冷えた指先で、空木の袖をつかむ。

「『できそこない』なんて人間は、いない」

ものごころついたころから、この舞台上で空木と舞ってきた。

ただ空木と在ることがうれしかった。

ともに居てくれる誰かのあることがうれしかったのだ。

「私には、この場に立つ資格がないんだ」

顔を覆い、絞りだすようにうめく凧牙のそばに空木がひざをつく。

凧牙が主であり、空木は供者だった。

けれどいつしか見あげるほどに成長した青年が、どんなときも己を護ってきたことを知っている。

「凧牙」

くずおれた主の身体を、供者が優しく抱きよせる。

凧牙は抗わなかった。

「舞わなくていい」

――元老院になど、従わなくていい。

「きらいだ」

しゃんと、髪飾りが揺れる。

壁の外からは、祭事衆の謡が朗々と響いてくる。

もう間に合わない。

謡と舞がそろわなければ、始祖たちは認めてはくれない。

「きらいだ。だいきらいだ」

青年は己になにも語ることなく、また明日からも過ごしていけよう。

神園の中のできごとは主と供者しか知らない。

舞が奉納されなかったとしても、空木がそうと伝えれば、元老衆は調べようがない。

それがなにを意味するか、知らない空木ではないだろうに。

――しゃん

――しゃらん

凧牙は空木にすぎた。

凍りついた手を伸べて。

虚ろで視たあの幼子のように泣いた。

――しゃん

――しゃらん

壁向こうから鈴の音が響く。

供者の青年は、主の手をとってささやいた。

「凧牙」

昔から変わらない、己を呼ぶ声。

「おまえは、いつだって自由だ」

こたえる代わりに、凧牙はその手に強く指をからめた。

泣きつかれて眠った凧牙を抱え、空木は石舞台を降りた。

篝火のはじける音を背に星空をあおぎ見る。

結局さいごまで、舞が奉納されることはなかった。

榊と元老衆が定めた供者が空木なら、その意思に逆うことを決めたのも空木だ。

「この祭儀に本当に意味があるのなら、あるいは」

元老院の命を破ることが、主の命運を変える導となるかもしれない。

いずれにせよ、今宵の巡りは途絶えた。

空木が凧牙のそばに在る限り、一族の暦は巡らない。

「ほころびは、いずれ――」

泣いている。

泣いている。

幼いこどもが手を伸べて。

なにかを、さがしもとめてる。

――なにがかなしいの。

いろいろなことをしてしまったの。

いろいろなことをしてしまったの。

自分があまりにも無知であったこと。

その、罪深さを。

了